

Hello!

菜の花プロジェクト

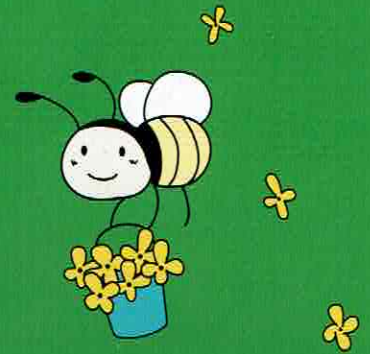
菜の花プロジェクトネットワークのあゆみと展望



Yellow Revolution

特定非営利活動法人 菜の花プロジェクトネットワーク

第6回全国菜の花サミット資料



Hello!
菜の花プロジェクト

菜の花プロジェクトネットワークの
あゆみと展望



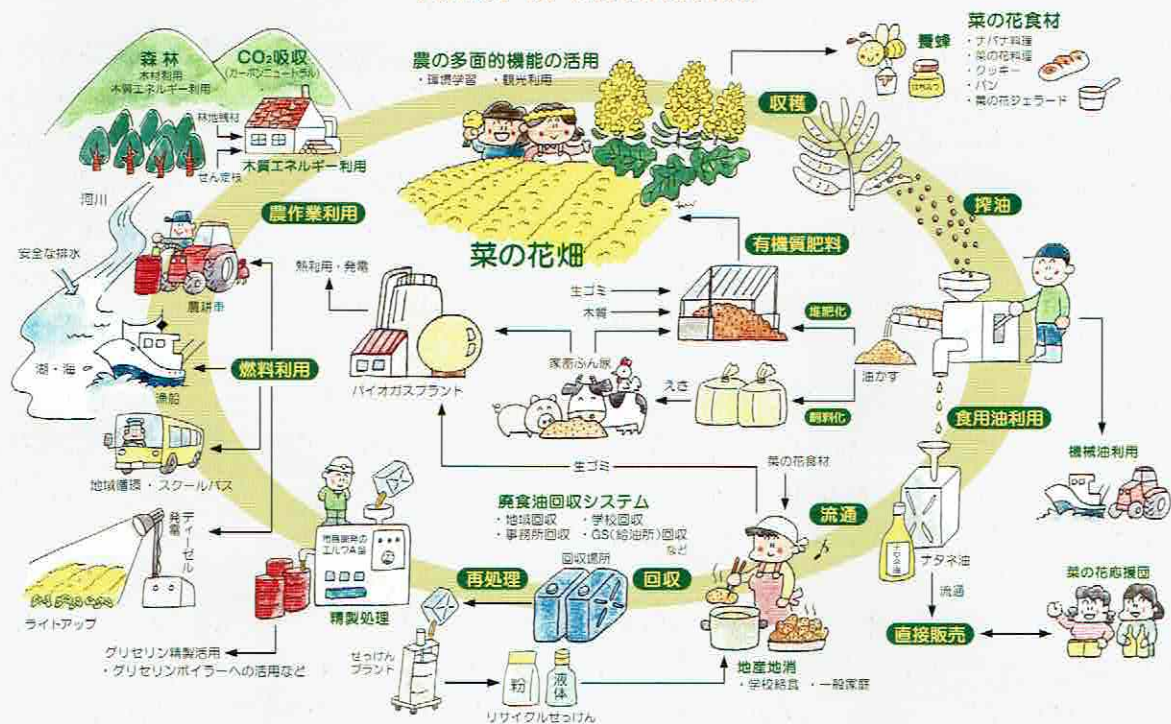
Hello! 菜の花プロジェクト

菜の花プロジェクトの取り組みを、資源循環サイクル図に沿って、簡単に説明します。
地域にある資源を有効に活用して、循環型社会を目指す私たちの取り組みに、あなたも参加されることを期待します。

NANOHANA PROJECT

菜の花プロジェクト循環サイクル

Power of Circulation



■ 菜の花の栽培

菜の花は日本の春の風物詩。昔はどの地域でも見られましたが、なたね油のほとんどが海外から輸入されている現在では、油をとるなたねの栽培はずいぶん減ってしまいました。なたねは水はけのよい畑地が栽培に適しています。昔は、苗を育てて定植しましたが、作業の簡素化のため、いまは「直まき」です。北と南では時期が異なりますが、9～10月頃に播種して、翌年4～5月ごろに開花。1ヶ月くらいきれいな花が咲き続けるのが魅力です。田畑がなくても、プランターなどでも菜の花の栽培を楽しめます。なたねの品種のうち、国産なたねで有名なのは「キザキノなたね」「ナナシキブ」「キラリボシ」。菜の花の蜜は美味しいため、菜の花畑のあるところにはミツバチが飛んできます。これを使って養蜂も行われています。

■ ナタネの収穫

「なたね梅雨」という言葉があります。花が咲き終わった菜の花は実をつけ、6月の梅雨の時期に、晴れ間をぬうようにして収穫されます。刈り取りは、昔は鍬で根元を切り取りましたが、今では汎用コンバインでの収穫。なたねは細長いきやに黒い種が20個ほど入っています。10アールあたり、200kgくらいの収穫があり、この収量をいかに増やすかが、なたね栽培のポイントです。

■ ナタネ油の搾油

ナタネの実には40%くらいの「油分」が含まれている。昔は、日本各地に搾油屋があり、自然圧搾の方法でナタネを絞る。絞る前に少し加熱するのがコツ。油脂メーカーでは化学薬品を混ぜて搾油率を上げているが、圧搾法で絞ると約3割のナタネ油が絞れる。油を絞った残りが「油かす」。これは、良質の堆肥になる。また、茎の部分は、昔は「たいまつ」や「焚きつけ」に使われていました。

■ ナタネ油の地産地消

菜の花プロジェクトでは、遺伝子組み換えのない国産ナタネの栽培を進めています。現在ナタネのほとんどは海外からの輸入で、しかも、そのほとんどが遺伝子組み換えだと言われています。国産ナタネはその心配はありませんが、価格は輸入ナタネ油に比べて割高です。そのため、地元の小中学校の給食で使ってもらう「食のグリーン購入」も進めています。

■ 廃食用油の回収

家庭から出る廃食用油をゴミにしないで、資源としてリサイクルすることが大事です。琵琶湖の水環境保全の運動は、家庭から出る廃食用油を回収するために、各自治会を回収拠点にして、地域で住民が自主的に回収する仕組みがつくられてきました。自治会などで「資源回収の日」が設けられ、地域の回収拠点までは各家庭が廃食用油を持っていき、回収拠点からは別の住民組織や行政などが集めるという仕組みになっています。愛東町(現東近江市)では、回収拠点から役場の資源回収ストックヤードまでも、自治会役員が運ぶ仕組みを作っており、廃食用油の回収コストを限りなくゼロにしています。この回収拠点は、自治会以外にも、公民館、学校、GS(給油所)など、様々な広がりを見せています。

■ せっけんへのリサイクル

廃食用油を熱し、苛性ソーダを加えて鹸化させると「せっけん」ができます。「合成洗剤の代わりにせっけんを使う」という1970年代の琵琶湖浄化の住民運動から、廃食用油をせっけんにリサイクルする取り組みが始まり、誰でもせっけんが作れる「せっけんミニ製造プラント」も開発されています。このプラントは、「ザイフェ(ドイツ語でせっけんのこと)」と名づけられ、全国各地で500台以上が稼働しています。

■ BDFへのリサイクル

廃食用油のもう一つのリサイクルの道が、軽油代替燃料であるBDF(バイオ・ディーゼル・フューエル)です。廃食用油8にメタノール2の割合で混ぜ、触媒としての水酸化カリウムを加え、加熱すると、粗製BDFとグリセリンに分離します。この粗製BDFを精製するとディーゼルエンジンによる機械に使える燃料となります。BDFは、チッ素酸化物は多いものの、軽油に比べて黒鉛はほとんど出ません。しかも、イオウ酸化物はゼロ、CO₂は植物の特徴として成長過程で吸収したものであるため、増減ゼロ(カーボンニュートラル)と見なされ、全体として「環境負荷の少ない燃料」と言えます。廃食用油を再生利用するBDF精製を地域で進めるために、BDF精製プラント「エルフ」が開発されてきました。「エルフ」は、EU規格のクリアを目指した品質の確保や、誰でも使える使い勝手、学習効果への配慮等を踏まえて改良が加えられ、「愛・地球賞」にも選ばれたプラントです。(※P.11参照)

■ BDF燃料の地域内利用

ナタネ油の地産地消と同様、リサイクルされたせっけんやBDFも地域内利用したいものです。廃食用油からのBDFは、量的な問題があるため、限られた利用しかできませんが、現在、地域循環・スクールバスやゴミ収集車、漁船や洋上学習船、さらにBDFは農から生まれたエネルギーであることから耕耘機やトラクター等の農耕機械への活用などを進めています。

■ 地域のバイオマスとの連動

菜の花プロジェクトは「田んぼのバイオマス」「家庭から出るバイオマス」に注目した資源循環サイクルづくりの取り組みですが、同じ地域内の山のバイオマスや畜産糞尿、家庭から出る生ゴミなど、ほかのバイオマスとも連動しながら行われています。また、「観光」「学習」「食」「料理」「ゴミ減量」「水質」「農業」「林業」「水産業」など、幅広いテーマとも連動しながら繰り広げられています。

菜の花プロジェクトネットワークが目指すもの

菜の花プロジェクトネットワークは、2001年春の第1回菜の花サミットで設立され、5年目を迎えた2005年に特定非営利活動法人として認証されました。

以下は、2005年10月にNPO法人認証申請をしたときの「設立趣旨」を元に作成した「趣旨」と「あゆみ」です。

1. 菜の花プロジェクトネットワーク設立の趣旨

私たちは、約500万年の人類史の中で、資源とエネルギーの両面で地球の限界に遭遇しており、私たちは、もはや一方的に自然からの恵みを受け続け、物的豊かさを享受し続けることは許されない状況におかれています。

有限で劣化する地球の上で、今の豊かさを維持しながら人類の生存を確保していくためには、物的豊かさと引き換えに地球環境を悪化させてしまった「大量生産・大量消費・大量廃棄」の一方通行型の経済社会を、環境負荷の少ない「資源循環型」の経済社会に、一刻も早く転換させていかななくてはなりません。

私たちが「資源循環型社会」を構築していくためには、それぞれの地域の特性を生かし、地域単位で、コンパクトでシンプルな生活構造をつくる必要があります。同時にそれを支える新しい発想、価値観、技術、仕組みに基づいた産業構造をつくりあげていくことが求められています。

2001年春、日本列島の各地から「菜の花」で結ばれた仲間が「菜の花サミット」に集い、菜の花プロジェクトの体験交流を通して、その考え方、価値観、行動様式などを交換しあいました。この菜の花サミットにおいて、全国各地の循環型社会づくりに取り組んできた知恵と力を相互に交換、交流し、その成果を全国各地に広げていくことが、新しい日本の創造につながることを確認しあいました。

私たちは、2001年の菜の花サミットにおいて、交流された菜の花プロジェクトの知恵や知識、意見や情報が大きなうねりとなり、全国に広がり、各地に根付き、地域から日本を資源循環型社会づくりに向かう明るく元気なエネルギーになっていくよう、「菜の花プロジェクトネットワーク」を設立しました。

そして、その後の活動を通じ、菜の花プロジェクトのネットワークは全国各地に広がりを見せ、バイオマスに注目した地域自立の資源循環型社会モデル創造活動として、各方面から注目されています。

こうした中で、私たちは、地域の人々のイニシアティブで生まれ、循環型社会の地域モデルになった「菜の花プロジェクト」をさらに力強く押し進めるため、菜の花プロジェクトへの政治の参加、地方自治体の参加、企業の参加、学術研究セクターの参加を強く働きかけ、産・官・学・民の真のパートナーシップにもとづく循環型社会づくりを進めるため、全国で菜の花プロジェクトを実践する人々による「特定非営利活動法人菜の花プロジェクトネットワーク」を設立することにしました。

2. 菜の花プロジェクトネットワーク設立までの経過

【第1期 廃食用油を回収してせっけんにリサイクルする活動を展開した時期】

1976年 このころより廃食用油回収がスタート。廃食用油回収ポイントは、滋賀県下に約400カ所にまで広がってきている。

1977年 琵琶湖の大規模な赤潮発生をきっかけに「せっけん運動」が始まる。

1978年 「琵琶湖を汚さない消費者の会」が設立される。80年ごろには、参加世帯数が5万世帯に広がる。

1979年 「琵琶湖富栄養化防止条例」制定、公布。

1980年 せっけん使用率が70.6%を記録。

1981年 80年をピークにせっけん使用率が減少。「粉石けんだけ使用」が半数を割る。

1990年 「滋賀県環境生活協同組合」設立総会が開催される。

1991年 せっけん運動の新たな展開を求めて「リサイクルせっけん協会」が設立される。

【第2期 BDF(バイオディーゼル燃料)として活用する活動を展開した時期】

1992年 廃食油からリサイクルせっけんをつくるミニプラント「ザイフェ」が開発される。せっけんだけへのリサイクルに限界が見え始め、新たな利用方法の模索が始まる中で、ドイツのナタネ油燃料化プログラムと出会い、ドイツの情報も含め、廃食油の燃料化に向けて情報収集を始める。

1993年 滋賀県工業技術センターの助力で、実験室レベルで廃食油燃料化の可能性を求めて実験を開始。滋賀県環境生協の車両、漁船、農耕機械などでのBDF燃料の使用テスト開始。テストプラントのフローづくりを開始。

1994年 環境庁(当時)の補助を受け、旧愛東町にテストプラントの設置を決定。大阪市にあるメーカーにテストプラントの製造を依頼。

1995年 旧愛東町にテストプラントを設置。「エルフA型」の設計・製造を開始。

1996年 旧愛東町のテストプラントを、「エルフA型」に。

1997年 旧八日市市に「エルフA型」を導入。

【第3期 菜の花づくりからバイオマスの地域内活用までの資源循環サイクルをつくる活動を展開した時期】

1998年 兵庫県伊丹市、旧新旭町社会就労センター、新潟県上越市などで「エルフA型」を相次いで導入。旧愛東町で「愛東イエロー菜の花エコプロジェクト」がスタート。菜の花の苗づくりが始まる。

1999年 北海道古平町社会就労センターに「エルフA型」導入。「エルフA型」の改良機「エルフA2型」の設計に着手。滋賀県が「菜の花栽培実験事業」を実施。菜の花の咲く愛東町で「アースデイしが」を開催。

2000年 シンポジウム「バイオマスエネルギーは未来を拓く」を開催。鹿児島県、福井県などに「エルフA2型」導入。A2型をさらに改良すべく、エルフA3型の設計・製造に着手。秋の「びわ湖環境ビジネスメッセ」の会場シャトルバス燃料に、滋賀県が廃食油燃料を利用。旧愛東町への視察が年間200組になり、全国への広がり到手応えが生まれる。

2001年 三重県、広島県に「エルフA2型」プラント導入。4月、菜の花サミットを旧新旭町で開催。27道府県から500人を超える参加者を集め、このサミットで「菜の花サミットの全国持ち回り継続開催」と「菜の花プロジェクトネットワークの設立」が合意される。

【第4期 バイオマスを活用して農と暮らしと地域の復興の活動を展開している時期】

2002年 第2回全国菜の花サミットを青森県横浜町で開催。サミットにおいて、菜の花プロジェクトネットワークの規約、役員が承認される。国が一府六省からなる「バイオマス・ニッポン総合戦略」を発表し、地域モデルとして菜の花プロジェクトを取り上げる。九州地区での菜の花プロジェクトの情報交換を行うための「九州菜の花サミット」を佐賀県伊万里市で開催。

2003年 第3回全国菜の花サミットを広島県大朝町で開催。サミットにおける問題提起を受け、旧新旭町をケーススタディにして環境と経済の好循環する地域づくりをさぐる「サステイナブル・デザイン委員会」を3ヶ年事業として開始。昨年度に引き続き、「第2回九州菜の花サミット」を熊本県本渡市で開催。

2004年 第4回全国菜の花サミットを茨城県八郷町で開催。「第3回九州菜の花サミット」が宮崎県で開催。未来世代の菜の花プロジェクトへの取り組みに焦点を当てたイベントとして「第1回 菜の花学会・楽会」を静岡県大東町で開催。滋賀県竜王町がバイオマス利活用事業の助成を受け、BDF精製システム整備に着手。エコプロダクツ展でこの年に設けられた「エコプロダクツ賞」のエコサービス部門で、唯一のNPOとして菜の花プロジェクトネットワークが「農林水産大臣賞」を受賞。

2005年 第5回全国菜の花サミットを兵庫県五色町で開催。愛知県で開催された「愛・地球博」の開会式場を菜の花で飾るプロジェクトに協力。開会式で「未来プロジェクト」として、菜の花プロジェクトが紹介された。国際博覧会初の市民参加による市民プロジェクトにも参加。BDF精製プラント「エルフ」が、「愛・地球賞」を受賞。国のバイオマス利活用事業の助成を受けて旧愛東町に完成した「あいとうエコプラザ菜の花館」の竣工と東近江市の誕生記念事業として「第2回菜の花学会・楽会 in 東近江」を開催。

2006年 特定非営利活動法人菜の花プロジェクトネットワーク法人登記。香川県で第6回全国菜の花サミットを開催。

2001年度

●菜の花サミットの開催と菜の花プロジェクトネットワーク設立

菜の花プロジェクトを積極的に進めていた旧愛東町(現滋賀県東近江市)に、全国各地から視察が増え始め、それぞれの地域で「愛東モデル」を実践するところがいくつか現れ始めたころ、菜の花プロジェクトの関係者が一同に集まる「サミット」の構想が生まれました。

地球環境基金の助成を受けることができ、愛東町とともに、菜の花プロジェクトに熱心に取り組んできた旧新旭町(現滋賀県高島市)を会場に「菜の花サミット」を開催する企画が立てられ、開催プログラムの準備や全国の取り組み団体の取材を元にした資料集の作成などが精力的に進められました。この時の資料集には、菜の花プロジェクト実施団体は13しか掲載されていませんでした。

琵琶湖西岸の人口わずか12,000人の町、新旭町の公民館が入りきれないくらいの人でいっぱいになったときは感動しました。全国からの「リレートーク」ではお互いの元気の交換が行われ、「菜の花サミットの全国持ち回りによる継続開催」と「菜の花プロジェクトの全国ネットワークの設立」が決められたのも嬉しいことでした。そればかりか、サミットの交流会で、第4回目までのサミット開催地(青森県横浜町、広島県いーねおおあさ、茨城県常総生協)から名乗りがあげられました。

翌年3月には九州ブロックで「菜の花サミットin伊万里」が開催され、ここで「規約の制定」と「役員」が決められ、菜の花プロジェクトネットワークは正式スタートを切ることになりました。

■この年の主な活動

第1回菜の花サミットの開催 (2001.4.28)



新旭町(現高島市)での第1回菜の花サミットには27道県から500人の参加がありました。サミットのあとの菜の花交流会では、第2回サミットに横浜町(青森県)、第3回サミットに大朝町(広島県)が立候補。

第1回九州菜の花サミット in 伊万里の開催 (2002.3.24)



第1回バイオエネルギー利用研究会開催 (2002.3.26)





2002年度

● 菜の花プロジェクトネットワークの正式設立と バイオエネルギー利用研究会

第2回菜の花サミットが、全国で有数の菜の花生産地である青森県横浜町で開催されたのと同時期に、国で「バイオマス・ニッポン」という野心的なプログラムがスタートしようとしていました。

温暖多湿の気候に恵まれた我が国は、バイオマスの宝庫です。

環境再生と地域の振興のためにバイオマスに目を向けようというプログラムは1府6省：内閣府、農林水産省、環境省、経済産業省、国土交通省、文部科学省、総務省の共管による「バイオマス・ニッポン総合戦略」として打ち出され、菜の花プロジェクトは、このプログラムの先行事例として注目されるようになります。

これにあわすように、菜の花プロジェクトネットワークは「バイオエネルギー利用研究会」を立ち上げ、全国を会場にして田んぼ、山、畜産糞尿などが生み出すバイオマスをエネルギーの視点から地域循環させる可能性についての調査研究を行いました。

* 詳しい研究成果はホームページをご覧ください。http://www.nanohana.gr.jp



バイオエネルギー利用研究会(2003.3.20~5回開催)

■ この年の主な活動

第2回菜の花サミットin横浜町の開催(2002.5.18)

青森県横浜町はかつては800haもの菜の花畑が広がっていたという我が国で有数の菜の花生産地です。ここの菜の花はキザキノナタネという品種で、搾油してなたね油にされます。現在でも160haの栽培面積を誇り、なたねの栽培だけでなく、観光利用や地域特産物開発などを進めてきました。国の菜の花栽培交付金が減額される中で、菜の花プロジェクトへの取り組みを進めることで、活路を見いだそうと第2回目のサミット誘致が行われました。



第2回バイオエネルギー利用研究会の開催(2002.8.30)

滋賀県安土町滋賀県農業総合センター



第3回研究会開催(2002.11.30)

畜産糞尿利用によるバイオガス発電施設の視察をかね、滋賀県畜産技術センターで実施



第5回研究会開催(2003.3.16)

最終回の研究会ではドイツからゲストを招いて、ドイツでの最新の取り組みの話を行いました。その中で、ニーダーザクセン州ユンデ村(人口800人)での「エネルギー自立の村づくり」の取り組みが始まっていることを学びました。

2003年度

●環境と経済の両立を目指して「サステイナブル・デザイン委員会」

第1回菜の花サミット資料が「冊子型」、第2回サミット資料が「マップ型」でしたが、第3回サミット資料は「カード型」でした。菜の花プロジェクトの全国に広がりが増えはじめ、広島県大朝町での「第3回全国菜の花サミット」では、資料集に46団体のデータが掲載されるまでになってきました。

順調に広がりを見せる菜の花プロジェクトでしたが、第3回サミットが提起したテーマは「菜の花プロジェクトは、ホンマに地域を元気にするんかいのお」というものでした。過疎問題の克服を目指して菜の花プロジェクトに取り組んでいる大朝町にとって、菜の花プロジェクトは環境問題を解決するとともに、地域経済の活性化、地域の元気の再生の切り札として考えていたのです。

地域や地球の環境問題が生まれてきたのは、いまの経済構造に問題があり、経済を一方通行型から循環型に変えることが必要であるという「三方よし+1経済」の提案は、第1回菜の花サミットで行った問題提起でした。しかし、その問題提起には、菜の花プロジェクトはまだ答えを見つけられずにいました。そこで、菜の花プロジェクトに取り組んできた新旭町をケーススタディに、菜の花プロジェクトが地域の環境と経済に与える影響を分析し、どのような取り組みを進めるかを調査研究しようというプロジェクトをスタートさせました。それが「サステイナブル・デザイン委員会」です。

3年の調査期間を設定して、一年目は、これまでの取り組みの分析評価と問題克服に向けた仮説づくりを進めました。

第3回「菜の花サミット in 大朝」の開催
(2003.4.19～20)



ドイツエコツアーの実施
(2003.5.26～6.2)



サステイナブル・デザイン委員会
(この年、第2回～5回開催)



「菜の花エコ革命」(創森社)の出版
(2004.1.24)





2004年度

●「菜の花学会」「韓国サミット」

「エコプロダクツ大賞受賞」「愛・地球博」

行政との協働作業でプロジェクトを進める菜の花プロジェクトネットワークにとって、全国に吹き荒れた「市町村合併」の荒波は、サステイナブル・デザイン委員会活動にも大きな影響を与えました。この一年は、大半の地方自治体が、「統治システム再編」にむけた市町村合併への対応に揺られて、自分たちの地域の未来に必要な「自治システムの再編」に力を注げない状態に陥ってしまいました。

こうした中において、菜の花プロジェクトネットワークは、菜の花サミットを韓国で開催し、また、静岡県と一緒に、高校生や小学生に焦点をあてた「菜の花学会・楽会」を開催することで、共感の拡大を図った一年でした。

12月に東京で開催されたエコプロダクツ展で、この年から設けられた「エコプロダクツ大賞」のエコサービス部門で、唯一NPOとして菜の花プロジェクトネットワークが「農林水産大臣賞」を受賞できたのは、とても嬉しいことでした。

3月25日から開催された「愛・地球博」開会式の会場を菜の花で飾り、菜の花プロジェクトを「未来プロジェクト」として紹介してほしいという依頼が舞い込み、地元愛知をはじめ全国10カ所の地域に協力をいただき、無事式典会場を満開にできました。また、万博史上初の市民参加による「市民プロジェクト」に参加、対話ギャラリー長期展示・「地球の授業」で菜の花プロジェクトの活動を紹介しました。

3月に「阪神淡路震災10年」の淡路島で行った第5回菜の花サミットには、これまで最高の1,000人の参加があり、47都道府県のほとんどで、菜の花プロジェクトが取り組まれるまでになってきました。

こうした広がりの中で、菜の花プロジェクトネットワークには、この取り組みが「ホンマに地域を元気にする」ための一歩前に行く「地域モデル」構築が期待されています。

■この年の主な活動

第1回菜の花学会・楽会(2004.4.7)



第4回菜の花サミット in いばらぎ (2004.4.24~25)



日韓菜の花サミット (2004.9.16~17)



全国ボランティアフェスティバル (2004.9.26)



第5回菜の花サミット in あわじ (2005.3.26~27)



エコプロダクツ展で
農林水産大臣賞受賞
(2004.12.9)

「愛・地球博」
(2005.3.25~9.25)



2005年度

● 旧愛東町に「菜の花館」が完成。第2回菜の花学会・楽会を開催

2003年1月に合併前の愛東町(現東近江市)に、国のバイオマス利活用フロンティア整備事業を活用して「あいとうエコプラザ・菜の花館」が完成し、この竣工と合併記念事業として「第2回菜の花学会・楽会」を開催しました。高校生のほか地元の大学での取り組みの発表も行われ、また2日目には研究者や専門家による研究報告や意見交換も行われ、本格的な、アカデミックセクターとの協働がスタートしました。

3年目を迎えたサステイナブル・デザイン委員会は、具体的な「高島モデル」の構築を目指して、3回のシンポジウムを開催しました。ドイツからのゲストや、徳島県上勝町の取り組みから、地域の資源をいかした取り組みを学び、最終のシンポジウムでは「内発的な産業振興の重要性」の話を行いました。

委員会の中で、検討してきた「観光再生」の提案は、滋賀県版経済特区に高島市が選ばれたことで、その有効性が試されようとしています。

■この年の主な活動

第2回「菜の花学会・楽会」を滋賀県東近江市で開催(2005.4.29~30)



BDF精製プラント「エルファ-3型」が愛・地球博で「愛・地球賞」を受賞(2005.6.)

菜の花プロジェクトを進めるために開発してきたBDF精製プラント「エルファ-3型」が、世界の100件の優れた環境技術を表彰する「愛・地球賞」を受賞しました。

持続可能な高島を目指してシンポジウムの開催

この年は、9月17日(ドイツからのゲスト)12月19日(徳島県上勝町(株)いりどり横石氏)2003年3月15日(前滋賀大学学長宮本憲一氏)の3回を開催しました。

菜の花プロジェクトネットワーク法人認証取得

2005年10月に滋賀県知事あて法人化認証の申請を行い、2006年1月に法人登記を完了しました。

EXPO 2005 AICHI JAPAN

愛・地球賞

—— 持続可能な未来をつくる100の地球環境技術

Global 100 Eco-Tech Awards 受賞

「バイオマス資源を活用するための技術」

再生可能な資源からクリーンエネルギーを生み出す。

廃食用油燃料製油装置「エルフA3型」

【仕様】

- 製油能力:100ℓ/日
- 燃料化方式:メチルエステル交換/水洗いバッチ式
- サイズ:W1600×D950×H2330mm
- 重量:550kg
- 電源:3相 200v 6kVA

* 200ℓ仕様「エルフA3-200LSW」もあります。

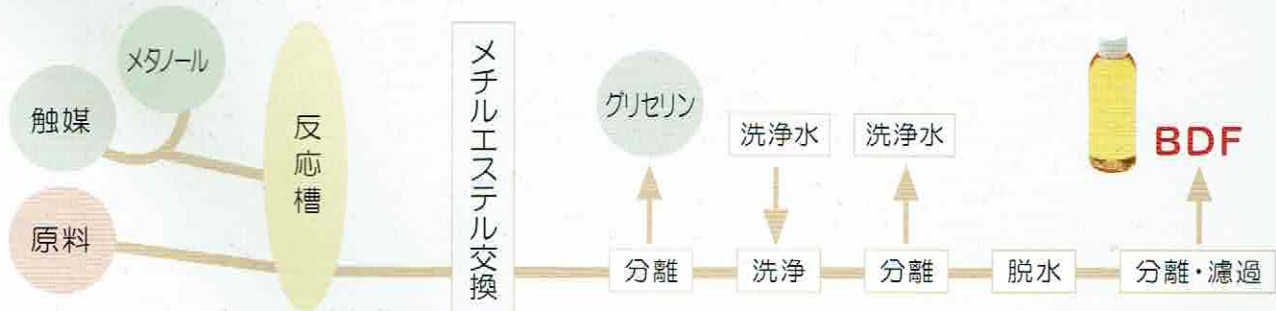
【エルフA3型の特長】

- コンパクトな装置で、生産能力は一日100ℓ。
- 各行程はコンピュータ制御で処理。作業時間は各工程積算で約1時間30分。
- 機械操作は簡単なので、安全です。
- 防錆性の高いオールステンレス製なので、耐久性にも優れています。
- 廃食用油という不安定な原料のため、各行程を窓により確認し品質の確保を図っています。
- 各工程が目で確認でき、市民啓発・学校教育にも利用していただいております。
- 廃食用油燃料は、硫黄酸化物や黒煙の発生が少なく、CO₂を増やさない地球環境にやさしいクリーンエネルギーです。



「エルフA3-100LSW」製油プロセス

処理時間…原料投入から製油まで3日間 100ℓ/日 製油可能



外部接続
(ユーティリティー)

原料供給ライン:使用済み廃食用油/薬液供給ライン:メタノール+触媒(KOH)/洗浄水供給ライン:洗浄水(水道水)
グリセリン排出ライン:20ℓタンクへ/排水ライン:中和槽へ/製品ライン:貯蔵タンクへ

Yellow Revolution

菜の花プロジェクトネットワークの戦略

地域自立の資源循環型社会の構築に向けて、
菜の花プロジェクトネットワークがこれまで進めてきた戦略の成果の上に立って、
これからの戦略を「質の高い地域モデル」の構築と「三方よし+1経済」の構築を目指して展開していきます。



■ 具体的な地域モデルづくり

菜の花プロジェクトは、持続可能な具体的で誰でも参加できる資源循環型社会の「地域モデル」づくりという戦略をもってスタートしました。観念論で循環型社会を声高に語るのではなく、地域で暮らしている誰もが、これが本当の循環型社会と実感できるような、具体的で、分かりやすい「地域モデル」をつくるのが有効だという発想からです。

それは、滋賀県愛東町(現東近江市)での住民と行政の積極的な関与により徐々に形ができはじめ、「菜の花プロジェクトの資源循環サイクル」ができることで、小さいながらも、どこの地域でも実戦可能な「モデル」が誕生したのです。

この「愛東モデル」は、それぞれの地域の課題や特性を加味しながら全国で取り組まれるようになり、地域自立の資源循環型社会を目指す菜の花プロジェクトの拡大につながっていきました。

■ 裾野拡大作戦

菜の花プロジェクトネットワークが誕生した2001年の第1回菜の花サミット資料集には、13の事例しか掲載されていませんでしたが、この取り組み事例を増やしていくことがネットワーク充足当時の大きな目標になりました。

第2回全国菜の花サミットの資料集からは、日本地図が描かれ、菜の花プロジェクトを1カ所でも実施している都道府県を黄色く塗りながら、菜の花プロジェクトの「裾野拡大作戦」が始まったのです。

菜の花プロジェクトネットワークの事務局が中世から近世の扉を開いた織田信長の居城があった安土にあるところから、冗談で「信長の野望作戦」とも言っていました。2005年春のサミット資料では、43都道府県が黄色に染め上げられ、裾野拡大作戦は、予想を上回る早さで、全国を席卷していったのです。

■ 頂上作戦

菜の花プロジェクトは、「裾野」を広げるとともに、お互いが刺激しあって、循環型社会のモデルとなる「質の高い地域モデル」に高めたいと考えていました。しなやかな運動を展開していくためには、ひとつの地域モデルを頂上にした「富士山型」よりも、いくつもの地域モデルを有する「八ヶ岳型」の運動展開を目指してきました。

いま、「愛東モデル」を参考にしながら、全国各地で展開される中で、いくつかの「新しい地域モデル」が芽生えてきています。菜の花プロジェクトは、「資源循環サイクル」を地域の特性や地域の課題を踏まえて展開されるため、菜の花プロジェクトに取り組む団体・地域の数だけ、新しい地域モデルが生まれていく可能性があります。

運動の質を落とすことなく運動の裾野を広げていくこと……それは、菜の花プロジェクトが地域自律・自立の「イエロー・レボリューション」を生み出すムーブメントになるための鍵を握っていると考えます。

■ 「三方よし+1経済」に向けて

第1回菜の花サミットの資料集に「三方よし+1経済」の提唱をおこないました。「もったいない」が国際語となる中で、モノの生産を表すGDPで真の豊かさを実感できなくなり、私たちは持続可能で豊かさを実感できる社会の構築のためには、生活を支える経済の構造を、利益を独り占めせず、地域と未来世代の豊かさを生み出していく構造に変えることが必要だと考えています。

近江商人は、商人哲学として「売り手よし、買い手よし、世間よし」の三方よしを掲げましたが、現在を生きる私たちは、そこに「孫子(まごこ)よし」を付け加え、世間という「同世代軸」と孫子という「未来世代軸」とともに幸せにする経済の再構築が求められているのです。菜の花プロジェクトは、「地域の自律と自立」を大事にしながら進めてきました。今後、地方政府や中央政府との協働、アカデミックセクターとの協働を経て、本格的な企業セクターとの協働の試みの中から、この答えを探っていきたいものです。

菜の花プロジェクト参加団体 2006

この一覧表は、2006年3月現在でネットワーク事務局が、菜の花プロジェクト取り組みを確認した団体です。

【北海道ブロック】

- ・たきかわ菜の花プロジェクト
- ・滝川ナタネ生産組合
- ・はこだて菜の花プロジェクト

【東北ブロック】

- ・横浜町役場(青森県)
- ・(独)農業・生物系特定産業技術研究機構(岩手県)
- ・大東町菜の花プロジェクト(岩手県)
- ・大東町農業技術センター(岩手県)
- ・大瀧村役場(秋田県)
- ・「八郎潟」(秋田県)
- ・美里町役場…旧小牛田町役場(宮城県)
- ・NPO法人 大島大好き(宮城県)
- ・菜の花プロジェクトネットワーク山形(山形県)
- ・金山新エネルギー実践研究会
…旧金山町役場(山形県)
- ・長井市役所(山形県)
- ・菜の花の村 未来づくりの会(山形県)
- ・北塩原村役場(福島県)
- ・福島県農業試験場(福島県)

【関東ブロック】

- ・常陸の国菜の花ネットワーク(茨城県)
 - NPO法人 アサザ基金
 - 石岡興業株式会社
 - いばらきよつ葉生活協同組合
 - 有限会社 ギルド
 - 塩川富士夫(事務局)
 - 自然生クラブ
 - 鈴木牧場
 - 東海村菜の花の会
 - 利根町菜の花会
 - 原田一夫
 - 平野清子
 - JA やさと
 - ゆうき菜の花の会
 - 海外参加 暮らし方研究会「菜の花畑」
- ・とちぎ菜の花プロジェクト(栃木県)
 - 創見交流会
 - システムサイエンス宇都宮専門学校
 - エコ・ハウス たかねざわ
 - THE MOA
- ・群馬菜の花プロジェクト(群馬県)
- ・NPO菜の花エコプロジェクト埼玉(埼玉県)
- ・千葉県菜の花エコプロジェクト(千葉県)
- ・生活クラブ生協千葉(千葉県)



- ・ NPO法人 せっけんの街 (千葉県)
- ・ 西東京菜の花エコプロジェクト (東京都)
- ・ 株式会社 ケイセブン (東京都)
- ・ 生活協同組合 コープやまなし (山梨県)
- ・ NPO法人 スペースふう (山梨県)
- ・ まちなかに油田をつくろう会 (山梨県)

【中部ブロック】

- ・ 上越市役所 (新潟県)
- ・ 水の駅 ビュー福島潟 (新潟県)
- ・ J A たかおか (富山県)
- ・ リサイクルネットワーク in 小松 (石川県)
- ・ NPO法人 かわだ夢グリーン (福井県)
- ・ NPO法人 環境 Uフレンズ (福井県)
- ・ NPO法人 上田広域市民事業ネットワーク (長野県)
- ・ NPO地域づくり工房 (長野県)
- ・ NPO法人 いびがわみずみずエコステーション (岐阜県)
- ・ 大垣市役所上石津町地域事務所 (岐阜県)
- ・ みのかも菜の花の会 (岐阜県)
- ・ 社団法人 静岡県トラック協会 (静岡県)
- ・ 静岡県菜の花ネットワーク (静岡県)
 - 磐田市向笠地区 菜の花環境システム推進協議会
 - 未来づくりねっとわーくなの花クラブ
- ・ 南伊豆町役場 (静岡県)
- ・ 農業組合法人 大東農産 (静岡県)
- ・ 静岡県立 磐田農業高等学校 (静岡県)
- ・ 焼津ビキニ市民ネット (静岡県)
- ・ 大谷菜の花の会 (静岡県)
- ・ あいち菜の花資源循環促進協議会 (愛知県)
- ・ あいち菜の花活用推進協議会 (愛知県)
 - NPO法人 名古屋南部地域再生センター
 - 名古屋市港区 イルカ作業所
 - 名古屋港菜の花エコプロジェクト
 - J A 愛知中央
 - 豊田・加茂 菜の花プロジェクト
 - 豊明市香掛切山台 菜の花発起人会
 - 岡崎市 太田油脂株式会社
 - 西尾市 食と農業と健康を守る会
 - つゆはし作業所
 - 有限会社 アースグリーン
 - 株式会社 エイトン
- ・ NPO法人 田原菜の花エコネットワーク (愛知県)
- ・ 小牧市女性の会 (愛知県)
- ・ アイセロ化学株式会社 (愛知県)
- ・ いなべ市藤原町 (三重県)



【近畿ブロック】

- ・あいとうイエロー菜の花エコプロジェクト(滋賀県)
- ・愛のまちエコ倶楽部(滋賀県)
- ・東近江市新エネルギー推進会議(滋賀県)
- ・菜の花エコライフネットワーク(滋賀県)
- ・高島市役所(滋賀県)
- ・竜王町役場(滋賀県)
- ・湖国菜の花エコプロジェクト(滋賀県)
- ・日野なのはなクラブ(滋賀県)
- ・滋賀県立八幡工業高等学校(滋賀県)
- ・近江八幡市立島小学校(滋賀県)
- ・立命館大学菜の花プロジェクト(滋賀県)
- ・株式会社水ロテクノス(滋賀県)
- ・社会就労センター いきいき(滋賀県)
- ・北びわこ湖上タクシー(滋賀県) 町村合併前
- ・大津菜の花プロジェクト(滋賀県)
- ・油藤商事株式会社(滋賀県)
- ・綾部・菜の花同窓会(京都府)
- ・菜の花プロジェクトみのお(大阪府)
- ・伊丹市環境クリーンセンター(兵庫県)
- ・あわじ菜の花エコプロジェクト
 洲本市役所 市町村合併
 淡路市役所 市町村合併
 兵庫県・淡路県民局
- ・菜の花プロジェクトなら(奈良県)



【中国・四国ブロック】

- ・境港市役所(鳥取県)
- ・鳥取環境大学(鳥取県)
- ・隠岐の島町 菜の花プロジェクト(島根県)
- ・NPO法人 斐伊川流域環境ネットワーク(島根県)
- ・松江市役所(島根県)
- ・エコライフたまの 菜の花プロジェクトネットワーク(岡山県)
 社団法人 玉野青年会議所
 岡山県立 興陽高等学校
 玉野市消費生活問題研究協議会
 原自治会
 白石自治会
 山田菜の花グループ
 やまだ・ごかん子ども楽級
 国際海岸環境教育会議(菜の花くらぶ)
 上山田自治会
 ナイカイ塩業株式会社
- ・岡山県立 水島工業高等学校(岡山県)
- ・新見市役所(岡山県)
- ・NPO法人 い〜ね おおあさ(広島県)
- ・トラタン村(山口県)
- ・豊島・島づくり委員会菜の花バスプロジェクト(香川県)
- ・かみかつ 菜の花倶楽部(徳島県)
- ・社会福祉法人 宿毛授産園(高知県)
- ・日高菜の花プロジェクト(高知県)



【九州ブロック】

- ・菜の花を咲かせようプロジェクト(福岡県)
- ・大木町菜の花プロジェクト推進会議(福岡県)
- ・NPO法人 伊万里はちがめプラン(佐賀県)
- ・島原菜の花プロジェクト(長崎県)
- ・本渡市役所(熊本県)
- ・天草菜の花プロジェクト(熊本県)
- ・愛林館(熊本県)
- ・熊本港ふれあい菜の花プロジェクト(熊本県)
- ・佐伯市(大分県)
- ・尾鈴菜の花プロジェクト(宮崎県)
- ・エコネットみやざき(宮崎県) 新規参加
- ・ウエルなのはな都城(宮崎県)
- ・開聞町観光協会(鹿児島県)
- ・大隅地区環境対策連絡協議会(鹿児島県)
- ・志布志市衛生自治会…旧有明町役場(鹿児島県)
- ・大崎町菜の花エコプロジェクト(鹿児島県)
- ・上屋久町役場(鹿児島県)
- ・屋久町役場(鹿児島県)
- ・有限会社 村吉ガス圧接工業(沖縄県)



詳しくは、<http://www.nanohana.gr.jp>を参照ください。(2006年3月現在)

あなたも菜の花プロジェクトネットワークへご参加ください。

NPO法人菜の花プロジェクトネットワークは、資源循環型地域社会づくりに取り組む個人・地域・団体の拡大と、より有効な「地域モデルづくり」に向けて、幅広い方々のご参加を呼びかけています。

1. 会員の種類

会員の種類	年会費の額	説明
正会員(個人)	2,000円	総会での議決権があります。
正会員(団体)	5,000円	総会での議決権があります。
賛助会員(個人)	一口 5,000円	総会での議決権はありません。
賛助会員(団体)	一口 20,000円	総会での議決権はありません。

2. 正会員になると

菜の花プロジェクトネットワークでは、次のような正会委員の特典を考えています。

1) 「菜の花プロジェクト」の名称使用

正会員は、菜の花プロジェクトへの参加ガイドラインを踏まえた活動について「菜の花プロジェクト」の名称で活動することができます。

2) ホームページへの団体情報の掲載

菜の花プロジェクトネットワークのwebサイトに、正会員(団体)の活動情報を掲載することができます。活動紹介は、随時情報の更新を行います。

3) メールマガジン配信、メーリングリストへの登録・利用

菜の花プロジェクトに取り組んでいる人々や団体の情報交換、意見交換のために、インターネットを利用したメールマガジンの発行、メーリングリストへの発信、オンライン会議室の設置などを考えています。正会員になると、これらの情報提供が受けられます。

4) 菜の花プロジェクトネットワーク主催イベント等への参加

「菜の花サミット」「菜の花学会・楽会」「ドイツ・エコツアー」「再生可能エネルギー普及啓発」「BDFカート試乗会」など菜の花プロジェクトネットワークが企画する各種イベントや研究会・研修ツアーへの参加ができます。

3. 賛助会員の特典

1) 団体の賛助会員は、賛助口数に応じて、賛助団体のwebにリンクが張られた「菜の花プロジェクト協賛広告」を掲載することができます。

2) 賛助会員の皆さんには、web等を通じて、菜の花プロジェクトネットワークが主催する勉強会やイベント等の活動のご案内を差し上げます。

4. 入会手続き

詳しい入会手続きは、web(<http://www.nanohana.gr.jp>)をごらんいただくか、ネットワーク事務局にお問い合わせください。

菜の花プロジェクト展開のガイドライン

2001年春に「菜の花プロジェクトネットワーク」が設立されて以来、全国で数多くの地域や団体が菜の花プロジェクトに共感し、さまざまな取り組みが進められるようになってきています。

資源循環型社会づくりのために、こうした取り組みの「裾野」をさらに広げる努力を続けるとともに、循環型社会形成に向けた質の高い取り組みを着実に進め、数多くの「地域モデル」が生まれる努力を重ねていくことが必要です。

そこで、菜の花プロジェクトに参加しようとする個人・団体の皆様には、以下のような「ガイドライン」を踏まえ、ダイナミックな取り組みを進められることを期待いたします。

【ガイドライン1】「住民主導、住民イニシアティブ」の取り組み

- ・ 菜の花プロジェクトは、地域の住民が主体となり、行政、企業、研究機関等との協働が基本です。
- ・ 資源循環型社会の構築には、行政や企業などとの連携が欠かせませんが、主役は地域に住む私たちです。私たちにとって住みよい、快適な社会づくりは、私たち自身から始まります。

【ガイドライン2】「地域の自律」と「地域の自立」を基本に

- ・ 菜の花プロジェクトは、地域自らが考え、地域の自発的な発想により進めること（地域の自律）、地域自らがまず行動し、地域の責任で地域を運営すること（地域の自立）を基本に取り組みます。
- ・ 行政や企業に最初から頼るのではなく、自らの創意と工夫を大事にします。

【ガイドライン3】「資源循環サイクル」の構築をめざします

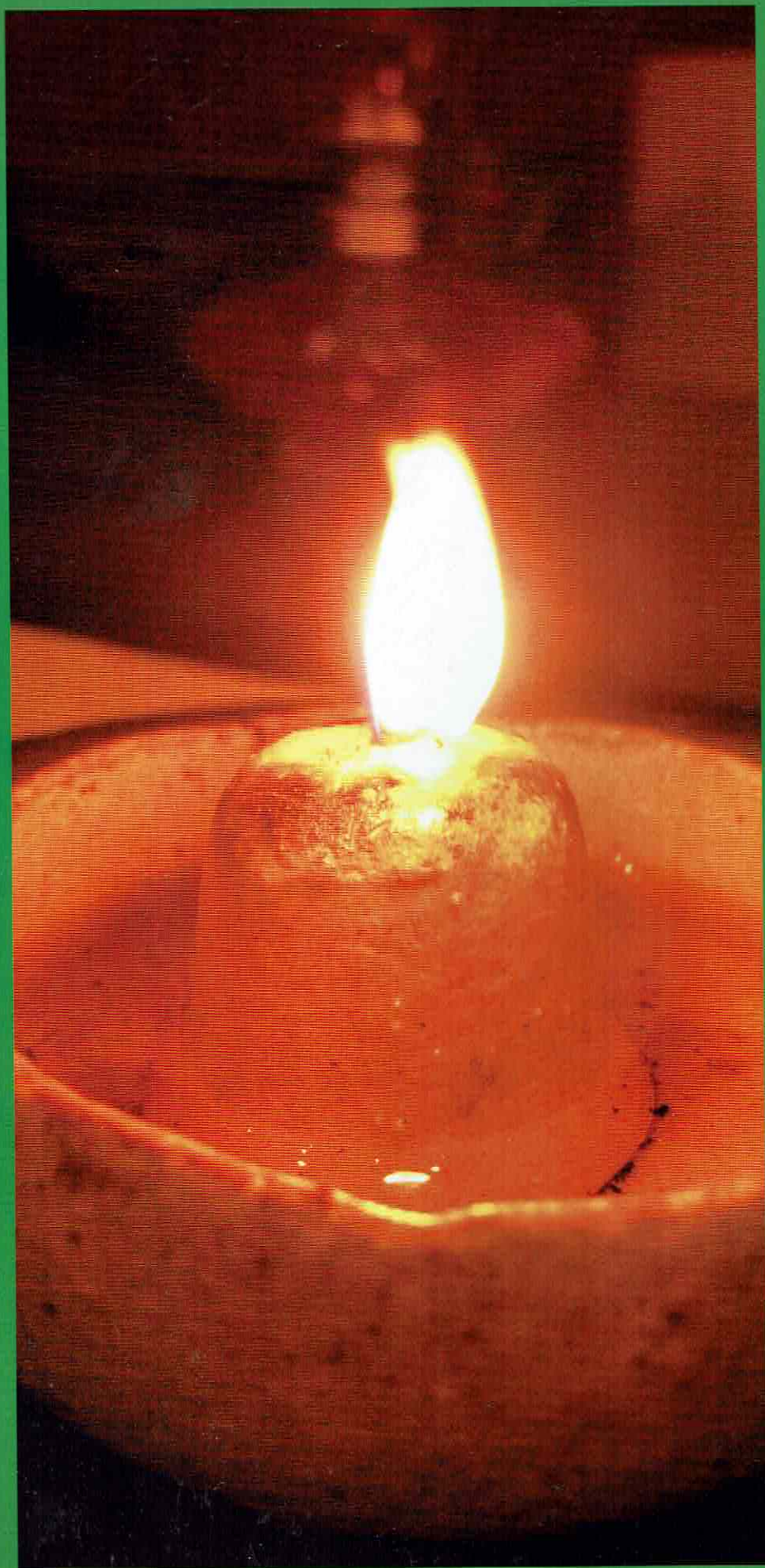
- ・ 菜の花プロジェクトは、できるだけ地域内での資源を活用し、資源の地産地消を図り、問題未然防止型の地域社会をつくり、問題が発生しても問題が小さいうちに地域の中で解決し、地域の外に持ち出さないという「資源循環サイクル」をつくることをめざす取り組みです。
- ・ それぞれの地域で取り組みやすいところからはじめ、地域の資源循環サイクルをつくることをめざします。

【ガイドライン4】「適正技術・中間技術」を大切に考えます

- ・ 地域における資源循環サイクルを支えるために、地域にあった適正技術を重視します。
- ・ せっけん製造ミニプラント「ザイフェ」や、BDF精製プラント「エルフ」のように、地域にあった技術や道具をうまく使うことが、無理のない資源循環型社会づくりにつながります。

【ガイドライン5】「暮らしの再生」「農の再生」「地域の再生」を目指す

- ・ 菜の花プロジェクトは、地域における農の多面的機能を復活・再生し、環境に負荷をかけない暮らし方の再生、地域経済の再生をめざしています。そして、この取り組みを通じて、地域の持続可能性を確保し、孫子（まごこ）が安心できる地域社会の維持と再生をめざします。
- ・ 田んぼや山が荒れ、「連鎖」が崩れた状態を再生させ、持続可能な地域や暮らしの再生を進めるために、「農」の再生をめざします。



Yellow Revolution

NPO法人 菜の花プロジェクトネットワーク役員名簿

代 表	藤井 絢子(滋賀県環境生活協同組合理事長)
副代表	保田 哲博(NPO法人 いーねおおさ理事長)
副代表	山田 実(NPO法人 愛のまちエコ倶楽部副理事長)
理 事	山崎多代里(NPO法人 知音・菜の花プロジェクトネットワーク山形代表)
	畠山 智子(常陸国菜の花ネットワーク代表)
	西村 登(社団法人 静岡トラック協会)
	植田茂太郎(財団法人 愛の田園振興公社理事長)
	岡田 清隆(あわじ菜の花エコプロジェクト推進会議)
	石井 亨(農事組合法人 てしまむら理事)
	福田 俊明(NPO法人 伊万里はちがめプラン理事長)
監 事	海東 英和(滋賀県高島市長)



<http://www.nanohana.gr.jp>

特定非営利活動法人 菜の花プロジェクトネットワーク
〒521-1341 滋賀県蒲生郡安土町上豊浦1273 tel&fax 0748-46-4730
e-mail : econavi@mx.biwa.ne.jp

※この事業は、環境保全機構地球環境基金部の助成を得て実施しています。